

論 文

## 女子大学生における親との接触経験と親子間呼称との関係

— 小学校時代の回顧 —

<sup>1</sup> 諸井 克英, <sup>2</sup> 芳賀 美乃里<sup>1</sup> 同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・特別任用教授<sup>2</sup> 同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・2017年度卒業生

## The Association between Past Relationship Experiences with Parents and Family Nicknames Used by Parents and Female Undergraduates: Looking back at the elementary school age.

<sup>1</sup> Katsuhide Moroi, <sup>2</sup> Minori Haga<sup>1</sup> Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special Appointment Professor<sup>2</sup> Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2017

In the present study, female undergraduates ( $N=260$ ) were asked to look back over two kinds of family names in the elementary school age. The respondents remembered the name they used for their father and mother and the name their parents used for them. Also, the Past Relationship Experiences with Parent Scale (Moroi *et al.*) was administered. The majority of respondents used family names which accorded with the social norm. The result of analyses of variance indicated that "name+chan" lowered control experience with father. The socio-psychological functioning of the family name was discussed.

Key word: family name, past relationship experiences with parents, elementary school age.

## I. 問題

本研究では、父親・母親と子ども(回答者)との間で「小学5・6年生の頃」に使用されていた呼称を女子大学生に回顧させた。呼称とは「ある集団の成員によってその集団の中でもっとも頻繁に使用される呼びかけ方」(横谷, 2014)である。使用されていた呼称を捉えたうえで、父親・母親による回答者に対する接触の仕方と呼称との関連を検討する。これを本研究の主な目的とした。

西欧語文法と日本語文法の相違を明らかにした鈴木(1973)によれば、西欧語では「話し手と話の相手を示すことばに関するしくみは大同小異」であり、「極めて限られた数」の所謂「人称代名詞」から構成される。対照的に、日本語では、例えば「お医者さん」などのように「一人称、二人

称の代名詞は、実際にはあまり用いられず」「何か別のことばで会話を進めていこうとする傾向が明瞭」である。

このような日本語文法の独自性を踏まえ、鈴木(1973)は、日本人の対人関係における呼称の特徴を、自称詞(「話し手が自分自身に言及することばのすべてを総括する概念」)と対称詞(「話の相手に言及することばの総称」)を軸に分析した。表1には鈴木が挙げた「年齢四十歳の小学校の先生」を取り巻く呼称を例示した。

学校社会での呼称の効果については次のような研究を指摘できる。

中條・滝浪(1989)は、小学4・5・6年生および中学2年生を対象に学級内の友だちに対する呼称と学級内における地位(ソシオトリック・テスト)との関連を検討した。小学生の場合、男子は同性に対しては「～さん」はあまり用い

表1 小学校教諭を取り巻く呼称例—鈴木(1973)に基づき作成—

対象	自称詞	対称詞
妻	おれ	おまえ/名前
息子	お父さん	おまえ/名前
父親	ぼく	お父さん
兄	ぼく	にいさん
弟	にいさん	おまえ/名前
校長	私	校長先生/先生
同僚	ぼく	あなた/きみ
生徒	先生	名前/代名詞
隣の子	おじさん	きみ/ほうや/名前+ちゃん

ず、異性に対しては「～さん」と「呼び捨て」に分かれた。女子では、異性に対しては「～くん」、同性には「～さん」が優勢であった。「教室」と「遊び場面」での呼称の使い分け率を見ると、小学生では全体的に低かったが、中学生では高く場面に適した呼称選択が示された。また、呼称と学級内の地位との間にはほとんど連関が認められなかった。

三島(2003)は、小学3～6年生を対象に学級内での呼称(どのように呼ばれているか)を検討した。男子児童では、「呼び捨て」されている者は、3・4年生では学級内で孤立傾向にあるが、5・6年生では6人以上の集団に所属する傾向があった。しかし、女子では呼称と集団関係に関連はなかった。また、男女ともに、呼称と学級内における相対的な強さ(同性児童から「強い」と認知されているか)との関連は得られなかった。

大学の蹴球部における呼称を論じた長島(1998)によれば、一般的に下級生は上級生に対して「姓+さん」を用いるが、練習中や試合中には「呼び捨て」や「愛称」を用いる。これは、仲間意識の高揚とともにプレイ中の「言い易さ」によることを意味する。

担任教師との関係に注目した尾崎(1998)によれば、中・高生男女は、担任の教師から「姓+くん」(対男子)や「姓+さん」(対女子)で呼ばれた時には全体的に好意的に受け止めるが、「姓呼び捨て」や「名呼び捨て」に対しては好意的な受け止めの割合が減少することを指摘した。呼称に対する教師側の思惑と生徒の受け止めにずれがあるのである。

横谷(2014)は、「家族内関係と呼称が関連する」という大命題の下に家族間の呼称に関する様々な研究を行った。その中で、横谷は、男女大学生を対象に父親・母親に対して使用している呼称と親子関係認知との関連を検討した。「目下の家族成員は目上の家族成員を親族名称で呼ぶべきである」とする親族呼称規範に従った呼称を用いている者とそうでない者との間には明確な親子関係認知の差異が認

められた。父親や母親を親族名称で呼ぶ者は、そうでない者に比べて、有意に情緒的接近をしやすいと認知しており、会話の頻度も多かった。また、父親に親族名称を用いる者は父親との関係満足感が高かった。

以上に述べた呼称に関する先行研究で得られた諸知見を踏まえながら、本研究では、女子大学生に「小学5・6年の頃」の親子関係を回顧させ、父親・母親に対して回答者が用いていた呼称に加え(横谷, 2014)、回答者に対して父親・母親が用いていた呼称を尋ね、対父親・対母親接触経験との関連を検討する。

諸井(2004)は、小野寺(1993)が開発した尺度を利用して、父親と母親それぞれとの現在の接触経験認知を測定した。因子分析によって、小野寺の結果がほぼ再現され、「情動的絆(子どもとの交流)」と「統制(子どもの行動に対する統制や規制)」の2因子が抽出された。調査時点での接触経験認知の2側面は父親との関係を対象とした別の研究(諸井, 2006)でも認められた。また、現時点の関係認知ではなく、過去関係を回顧させた場合にも同様の2側面が検出された(「中学3年生の頃」: 諸井(2006)/「小学5・6年生の頃」: 諸井・小切間・荒木(2010)、諸井・橋本・中井(2011))。したがって、父親・母親との関係は現時点であれ回顧であれ「情動的絆」と「統制」の2側面が普遍的に現れるといえる。本研究では、「小学5・6年生の頃」を回顧させ、父親・母親と回答者の間で交わされる呼称と接触経験認知との関係を検討する。この目的のために、女子大学生を対象とした質問紙調査を実施した。

## II. 方法

### 調査対象および調査の実施

京都府内に位置する私立女子大学での社会心理学関係の講義を利用して質問紙調査が実施された(2018年5月15日)。回答にあたっては匿名性を保証し成績と無関連であることを強調した。質問紙実施後に研究目的と研究上の意義を簡潔に説明した。

青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)を除き、各尺度に完全回答した女子学生260名を分析対象とした(1年生241名, 2年生13名, 3年生5名, 4年生1名)。回答者の平均年齢は18.24歳( $SD=0.58$ , 18～22歳)であった。

### 質問紙の構成

質問紙は、回答者の基本的属性に加え、①対父親・対母親接触経験尺度(過去)、および②父親・母親と回答者との間の呼称に関する設問から構成されている。

表2-a 対父親接触経験尺度(過去)に関する因子分析(最尤法, プロマックス回転( $k=3$ ))—回転後の負荷量—

	*	I	II
<b>〔I. 情動的絆〕</b>			
fa_a_4 父親は、よく私の相手をしてくれた。	情	.81	-.15
fa_b_5 父親と私は、2人で外出することがあった。	情	.71	-.15
fa_b_7 父親は、一緒にテレビを見ながら番組について私に話をしてくれた。	情	.62	-.06
fa_b_2 父親は、私の頭を撫でたり、私の肩をたたいたりしてくれた。	情	.61	.10
fa_b_1 父親は、世の中で起こっていることについて私に話をしてくれた。	情	.55	.20
fa_a_6 父親は、自分の子どもの頃や学生時代の思い出について私に話をしてくれた。	情	.55	.05
fa_a_2 父親は、運動会や発表会などの特別な行事には来てくれた。	情	.54	-.02
fa_a_1 父親は、自分の仕事や職場の出来事について私に話をしてくれた。	情	.51	.09
fa_a_7 父親は、家族旅行などでいろいろな所に私を連れて行ってくれた。	情	.51	-.04
fa_b_9 父親は、私の将来について気にかけていた。	情	.49	.31
fa_a_8 父親は、私がどこで何をしているかをいつも気にかけていた。	情	.41	.31
<b>〔II. 統制〕</b>			
fa_b_4 父親は、私のしつけに厳しく厳格な教育方針をもっていた。	統	-.05	.81
fa_b_10 父親は、私が悪いことをした時、かっとして怒った。	統	-.06	.71
fa_b_6 父親は、叱ったり批判することが私のためになると思っていた。	統	.10	.68
fa_a_5 父親は、私に口答えを許さなかった。	統	-.22	.65
fa_a_9 父親は、私の帰宅時刻にうるさかった。	統	.13	.58
fa_b_3 父親は、私の身なりについていろいろ注文をつけてきた。	統	.15	.48
<b>〔因子相関〕</b>	I	***	.27

$N=260$

\* 先行研究(諸井・小切間・荒木, 2010)との対応: 情動的絆, 統制

初期因子固有値>2.28; 初期説明率47.05%

適合度:  $\chi^2_{(103)}=268.22, p=.001$

### (1) 対父親・対母親接触経験尺度(過去)

回答者が小学生時代に父親と母親との間の接触に関する認知を諸井ら(2010)と同じ尺度を用いて測定した。

対父親接触経験尺度<過去>では、回答者に「小学5・6年生の頃」の父親との関係の様子を思い出させ、22項目それぞれがあてはまる程度を4点尺度で回答させた(「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。母親についても同様な仕方で評定させた。なお、「小学5・6年生の頃」に死別や離別のために父親あるいは母親がいない場合には、該当する設問を飛ばすように指示した。

評定順の効果を相殺するために、2つの尺度でそれぞれ頁単位(2頁)でランダムに並び替えた。さらに、回答者の半数は対父親接触経験尺度<過去>を先に( $N=135$ )、残りの者は対母親接触経験尺度<過去>を先に回答させた( $N=125$ )。

### (2) 父親・母親と回答者との間の呼称に関する設問

回答者に「小学5・6年の頃」を想起させ、父親・母親と回答者との間の呼称を訪ねた。まず、父親が回答者に対して用いた呼称を記入させ、その呼称が用いられた時の回答者の気分を4点尺度で回答させた(「4. かなり嫌だった」、

「3. どちらかといえば嫌だった」, 「2. どちらかといえば心地よかった」, 「1. 心地よかった」)。次に、回答者が父親に対して用いた呼称を記入させ、その呼称を用いた時の父親の気分を推測させた(「4. かなり嫌だったと思う」, 「3. どちらかといえば嫌だったと思う」, 「2. どちらかといえば心地よかったと思う」, 「1. 心地よかったと思う」)。母親についても、同様な設問に回答させた。なお、呼称については、「最も頻度が高かった呼び名」を記入させた。

## III. 結果

### 対父親・対母親接触経験尺度(過去)の検討

2種類の接触経験尺度それぞれについて、項目平均値の偏り( $1.5 < m < 3.5$ )と標準偏差値( $SD > .60$ )の基準を設けチェックした。2尺度それぞれで4項目が不適切であった(対父親:  $m \approx 1.5$ , fa\_a\_3, fa\_a\_11;  $m < 1.5$ , fa\_a\_10, fa\_b\_8;  $SD < .60$ , fa\_a\_10, fa\_b\_8/対母親:  $m > 3.5$ , mo\_a\_2;  $m \approx 3.5$ , mo\_a\_4, mo\_b\_5;  $m < 1.5$ , mo\_b\_8;  $SD < .60$ , mo\_a\_2, mo\_b\_8)。これらの項目を除きそれぞれの尺度で因子分析(最尤法, プロマックス回転

表2-b 対母親接触経験尺度(過去)に関する因子分析(最尤法, プロマックス回転( $k=3$ ))—一回転後の負荷量—

	*	I	II
〔I. 統制〕			
mo_b_6 母親は、叱ったり批判することが私のためになると思っていた。	統	.67	.13
mo_b_4 母親は、私のしつけに厳しく厳格な教育方針をもってた。	統	.67	.01
mo_b_10 母親は、私が悪いことをした時、かっとして怒った。	統	.67	-.02
mo_a_9 母親は、私の帰宅時刻にうるさかった。	統	.55	-.14
mo_a_5 母親は、私に口答えを許さなかった。	統	.54	-.03
mo_a_11 私のことについては、母親が最後には決めていた。	統	.47	.01
〔II. 情動的絆〕			
mo_a_6 母親は、自分の子どもの頃や学生時代の思い出について私に話をしてくれた。	絆	-.07	.64
mo_a_10 母親は、自分の好みの異性タイプについて私に話をしてくれた。	絆	-.10	.59
mo_a_3 私の異性の友だち関係について母親の方から尋ねてきた。	絆	.19	.59
mo_a_1 母親は、自分の仕事や職場の出来事について私に話をしてくれた。	x	-.01	.58
mo_b_7 母親は、一緒にテレビを見ながら番組について私に話をしてくれた。	絆	-.06	.50
mo_b_1 母親は、世の中で起こっていることについて私に話をしてくれた。	絆	.03	.47
mo_b_2 母親は、私の頭を撫でたり、私の肩をたたいたりしてくれた。	絆	.03	.47
〔因子相関〕	I	***	.09

N=260

\* 先行研究(諸井・小切間・荒木, 2010)との対応: 統制, 情動的絆, 残余項目(x)

初期因子固有値&gt;2.66; 初期説明率43.48%

適合度: $\chi^2_{(53)}=90.45, p=.001$ 

表3 父親・母親と回答者との間で用いられた呼称

〔父親と回答者との間の呼称〕				〔母親と回答者との間の呼称〕			
回答者に対する呼称	N	父親に対する呼称	N	回答者に対する呼称	N	母親に対する呼称	N
名前呼び捨て	183	お父さん	111	名前呼び捨て	169	お母さん	117
名前+ちゃん	25	父さん	7	名前+ちゃん	41	母さん	5
ニックネーム	44	お父ちゃん	2	ニックネーム	46	お母ちゃん	2
家族の中での役割名	6	父ちゃん	12	家族の中での役割名	3	母ちゃん	4
二人称	1	パパ	121	二人称	1	ママ	123
間違えて呼ばれる	1	ニックネーム	6			ニックネーム	5
		おとん	1			名前+ちゃん	2

網掛け: 以下の分析で使用する呼称(N&gt;20)

< $k=3$ >を行い、先行研究に従って(諸井ら, 2010), 2因子解を求めた。因子分析では、①特定因子への負荷量が十分に大きく(絶対値 $\geq .40$ )、②他因子への負荷が小さい(絶対値<.40)という基準を設定した。各項目が単一の因子にのみ.40以上の負荷量を示すように項目を削除しながら①と②の基準を充たすまで分析を反復した。明確な因子パターンが得られる解を採用した。

対父親、対母親ともに、先行研究(諸井ら, 2010)と一致した明確な2因子構造が得られた(表2-a, 表2-b)。それぞれ「情動的絆」と「統制」の2因子が現れた(対父親: 第I因子「情動的絆」、第II因子「統制」; 対母親: それぞれ「統制」, 「情動的絆」)。2つの因子分析に基づき、因子得点を求め(回帰法)、以下の分析対象とした。(対父親: 対父親\_I\_

情動的絆, 対父親\_II\_統制/対母親: 対母親\_I\_統制, 対母親\_II\_情動的絆)。

### 父親・母親と回答者との間の呼称

回答者が「小学5・6年生の頃」に父親・母親と回答者との間で用いられた呼称について整理した(表3)。

まず父親との間の呼称に関する結果を述べる。回答者に対して父親が用いた呼称では、「名前呼び捨て」が大半であったが、「ニックネーム」や「名前+ちゃん」も見られた。父親に対して回答者が用いた呼称では、「パパ」と「お父さん」がそれぞれほぼ半数を占めた。

次に母親との呼称の結果を見ると、回答者に対して母親が用いた呼称では「呼称呼び捨て」が大半であり、「ニックネーム」や「名前+ちゃん」も使用されていた。母親に対し

表4-a 呼称と対父親・母親接触経験との関連

[父親と回答者との間の呼称]				[母親と回答者との間の呼称]							
回答者に対する呼称	N	対父親_I_情動的絆	対父親_II_統制	回答者に対する呼称	N	対母親_I_統制	対母親_II_情動的絆				
名前呼び捨て	183	<i>m</i>	-0.01	0.03	a	名前呼び捨て	169	<i>m</i>	0.01	0.05	
		<i>SD</i>	0.90	0.91				<i>SD</i>	0.86	0.88	
名前+ちゃん	25	<i>m</i>	-0.20	-0.49	b	名前+ちゃん	41	<i>m</i>	-0.12	-0.20	
		<i>SD</i>	0.98	0.66				<i>SD</i>	0.88	0.84	
ニックネーム	44	<i>m</i>	0.20	0.09	a	ニックネーム	46	<i>m</i>	0.00	0.00	
		<i>SD</i>	0.95	1.01				<i>SD</i>	1.01	0.90	
[一元配置の分散分析]		$F_{(2,249)}=1.70, ns.$		$F_{(2,249)}=3.93, p=.021$		[一元配置の分散分析]		$F_{(2,253)}=0.37, ns.$		$F_{(2,253)}=1.25, ns.$	
[共分散分析]		$F_{(2,248)}=1.00, ns.^{(a)}$		$F_{(2,248)}=3.21, p=.042^{(b)}$		[共分散分析]		$F_{(2,252)}=0.25, ns.^{(c)}$		$F_{(2,252)}=1.11, ns.^{(d)}$	
父親に対する呼称	N	対父親_I_情動的絆	対父親_II_統制	母親に対する呼称	N	対母親_I_統制	対母親_II_情動的絆				
お父さん	111	<i>m</i>	-0.03	0.09	お母さん	117	<i>m</i>	0.04	0.02		
		<i>SD</i>	1.05	0.94			<i>SD</i>	0.88	0.88		
パパ	121	<i>m</i>	0.03	-0.09	ママ	123	<i>m</i>	-0.02	0.02		
		<i>SD</i>	0.88	0.90			<i>SD</i>	0.89	0.87		
[独立したt検定]		$t_{(230)}=-.45, ns.$		$t_{(230)}=1.46, ns.$		[独立したt検定]		$t_{(238)}=0.54, ns.$		$t_{(238)}=0.95, ns.$	
[共分散分析]		$F_{(1,229)}=.96, ns.^{(a)}$		$F_{(1,229)}=2.88, ns.^{(b)}$		[共分散分析]		$F_{(1,237)}=0.29, ns.^{(c)}$		$F_{(1,237)}=0.00, ns.^{(d)}$	

(a) 共変量：対父親\_II\_統制 (b) 共変量：対父親\_I\_情動的絆 (c) 共変量：対母親\_II\_情動的絆 (d) 共変量：対母親\_I\_統制

表4-b 呼称と呼称使用時の感情

[父親による呼称使用時の感情]				[母親による呼称使用時の感情]			
回答者に対する呼称	N	<i>m</i>	<i>SD</i>	回答者に対する呼称	N	<i>m</i>	<i>SD</i>
名前呼び捨て	183	1.43	0.64	名前呼び捨て	169	1.34	0.51
名前+ちゃん	25	1.64	0.76	名前+ちゃん	41	1.29	0.46
ニックネーム	44	1.45	0.59	ニックネーム	46	1.35	0.57
[一元配置の分散分析]		$F_{(2,249)}=1.21, ns.$		[一元配置の分散分析]		$F_{(2,253)}=0.15, ns.$	
[共分散分析]		$F_{(2,247)}=1.60, ns.^{(a)}$		[共分散分析]		$F_{(2,251)}=.43, ns.^{(b)}$	
父親に対する呼称	N	<i>m</i>	<i>SD</i>	母親に対する呼称	N	<i>m</i>	<i>SD</i>
お父さん	111	1.36	0.60	お母さん	117	1.25	0.45
パパ	121	1.31	0.50	ママ	123	1.33	0.52
[独立したt検定]		$t_{(230)}=0.64, ns.$		[独立したt検定]		$t_{(236,21)}=-1.23, ns.$	
[共分散分析]		$F_{(1,228)}=.10, ns.^{(a)}$		[共分散分析]		$F_{(1,226)}=1.60, ns.^{(b)}$	

(a) 共変量：対父親\_I\_情動的絆, 対父親\_II\_統制 (b) 共変量：対母親\_I\_統制, 対母親\_II\_情動的絆

て回答者が用いた呼称では、「ママ」と「お母さん」がそれぞれほぼ半数近くに及んだ。

以上から、父親・母親と回答者の間で用いられている呼称の種類は、父親と母親の場合でかなり類似しているといえよう。なお、以下の分析では、少数の者 ( $N < 20$ ) しか使用していない呼称カテゴリーを除き、対父親・対母親接触経験や呼称使用時の感情に関する分析を行った。

## 父親・母親と回答者との間の呼称と心理学的関係

### (1) 呼称と対父親・対母親接触経験との関係

まず、回答者に対して父親あるいは母親が用いていた呼称（「名前呼び捨て」、「名前+ちゃん」、「ニックネーム」）と接触経験との関連を見るために一元配置の分散分析を行った（表4-a；左側部分）。対父親\_II\_統制でのみ回答者に対して父親が用いた呼称の有意な影響が検出された。下位検定によると、「名前+ちゃん」の場合には「名前呼び捨て」や「ニックネーム」よりも父親からの「統制」が低かった。

次に母親との間の呼称についても上記と同様の分析を試みたが（表4-a；右側部分）、いずれの分析でも有意な効果は現れなかった。

なお、共分散分析（共変量は表4-aを参照）も行ったが、単純分析と同様な結果が見られた。

### (2) 呼称と呼称使用時の感情

回答者に対して父親あるいは母親が用いていた呼称（「名前呼び捨て」、「名前+ちゃん」、「ニックネーム」）と呼称使用時の感情との関連を見るために一元配置の分散分析を実施した。また、回答者が用いた呼称の効果については検定を試みた。いずれの分析についても呼称の有意な効果は現れなかった（表4-b；上部）。

また、共分散分析も行ったが（共変量は表4-bを参照）、単純分析と同様にいずれの分析でも有意な効果は得られなかった。

表4-c 接触経験と呼称使用時の感情との関連：ピアソン相関値

	対父親_I_情動的絆		対父親_II_統制	
父親による呼称使用時の感情	-0.44	p=.001	.01	
	<-.45>a	p=.001	<.13>b	p=.043
父親に対する呼称使用時の感情	-.37	p=.001	.01	
	<-.37>a	p=.001	<.13>b	p=.037
	対母親_I_統制		対母親_II_情動的絆	
母親による呼称使用時の感情	.17	p=.006	-.27	p=.001
	<.17>c	p=.006	<-.25>d	p=.001
母親に対する呼称使用時の感情	.03		-.16	p=.009
	<.03>c		<-0.12>d	

N=260

<>内：偏相関値(統制変数それぞれa～dに示す)

- a：対父親\_II\_統制, 対母親\_I\_統制, 対母親\_II\_情動的絆
- b：対父親\_I\_情動的絆, 対母親\_I\_統制, 対母親\_II\_情動的絆
- c：対父親\_I\_情動的絆, 対父親\_II\_統制, 対母親\_II\_情動的絆
- d：対父親\_I\_情動的絆, 対父親\_II\_統制, 対母親\_I\_統制

表5-a 父親・母親と回答者との間の呼称の対応

	[回答者が父親に対して用いた呼称]								
	お父さん	父さん	お父ちゃん	父ちゃん	パパ	ニックネーム	おとん		
[父親が回答者に対して用いた呼称]									
名前呼び捨て	78	6	2	11	82	4	0		
名前+ちゃん	10	0	0	0	14	1	0		
ニックネーム	19	1	0	0	22	1	1		
家族の中での役割名	2	0	0	1	3	0	0		
二人称	1	0	0	0	0	0	0		
間違えて呼ばれる	1	0	0	0	0	0	0		
	[回答者が母親に対して用いた呼称]								
	お母さん	母さん	お母ちゃん	母ちゃん	ママ	ニックネーム	名前+ちゃん	おかん	マミー
[母親が回答者に対して用いた呼称]									
名前呼び捨て	78	5	2	2	76	4	1	0	1
名前+ちゃん	14	0	0	2	23	1	1	0	0
ニックネーム	21	0	0	0	24	0	0	1	0
家族の中での役割名	3	0	0	0	0	0	0	0	0
二人称	1	0	0	0	0	0	0	0	0

N=260

(3) 対父親・対母親接触経験と呼称使用時の感情との関係

対父親・対母親接触経験と呼称使用時の感情との関係を検討するために、ピアソン相関値と偏相関値を求めた(表4-c)。偏相関分析での統制変数は表4-cの下部に示した。

ここでは、偏相関分析の結果を説明しよう。父親、母親ともに、「情動的絆」感情が高いほど、互いの呼称使用時に心地よい感情が喚起されたり、その喚起を推測していた。しかし、「統制」感情は、父親や母親が回答者への当該呼称を使用した場合に、回答者の不快感を喚起した。興味深いことに父親に対して当該呼称を回答者が使用した時には「統制」感情が不快感の推測を伴っていたが、母親の場合には無関係であった。

補足分析—父親・母親と回答者との間の呼称同士の関係—

(1) 父親・母親と回答者との間の呼称同士の関係

父親を「お父さん」と呼ぶか「パパ」と呼ぶかによって父親が回答者に対して用いた呼称が異なるかを検討した(表5-a；上部)。母親についても同様な関連を見た(表5-b；下部)。いずれの場合も、「お父さん(お母さん)」と「パパ(ママ)」という呼称による差異は認められなかった(表5-a)。

(2) 父親と母親に関する呼称間の関係

父親と母親に対して回答者が用いた呼称の間の関連を見ると(表5-b；上部)、「お父さん」と「お母さん」、「パパ」と「ママ」の組み合わせが顕著であった。また、親と母親が回答者に対して用いた呼称の間の関連を検討すると(表5-b；下部)、「名前呼び捨て」と「名前呼び捨て」、「ニックネー

表5-b 回答者が父親・母親に対して用いた呼称および父親・母親が回答者に対して用いた呼称の対応

	[回答者が母親に対して用いた呼称]								
	お母さん	母さん	お母ちゃん	母ちゃん	ママ	ニックネーム	名前+ちゃん	おかん	マミー
[父親が回答者に対して用いた呼称]									
お父さん	106	0	0	0	4	0	0	0	1
父さん	3	3	0	0	0	1	0	0	0
お父ちゃん	0	0	2	0	0	0	0	0	0
父ちゃん	0	1	0	4	5	1	1	0	0
パパ	6	1	0	0	113	0	1	0	0
ニックネーム	2	0	0	0	1	3	0	0	0
おとん	0	0	0	0	0	0	0	1	0
[父親が回答者に対して用いた呼称]									
	名前呼び捨て	名前+ちゃん	ニックネーム	家族の中の役割名	二人称				
[母親が回答者に対して用いた呼称]									
名前呼び捨て	149	23	9	2	0				
名前+ちゃん	8	17	0	0	0				
ニックネーム	8	0	36	0	0				
家族の中の役割名	3	1	1	1	0				
二人称	1	0	0	0	0				
間違えて呼ばれる	0	0	0	0	1				

N=260

ム」と「ニックネーム」の組み合わせの対応が見られた。以上の結果は、家族成員間に呼称形式の一致が存在することを示していた。

#### IV. 考察

##### 父親・母親と回答者との間の呼称

渡辺(1998)は、日本社会における「敬避」規範について言及した。「下位の者が上位の者を呼称する場合、その名前を敬避し、代わりにその親族名称、ポスト名、職業名などを使って呼称しようとする」規範意識が存在するのである。先述した横谷(2014)が言う親族呼称規範も渡辺の「敬避」規範に含まれる。

本研究では、親族呼称規範に反する呼称はほとんど挙げられなかった(「ニックネーム」(対父親6名, 対母親5名)や「名前+ちゃん」(対母親5名); 全体260名)。先述した現時点の呼称を対象とした横谷(2014)の研究でもそのような者は少数であった(対父親20名/286名, 対母親17名/304名; ただし男女混み)。したがって、父親・母親に対する呼称は、親族呼称規範遵守の有無よりも「お父さん(お母さん)」と「パパ(ママ)」という呼称の基底にある心理的機制のほうが重要といえよう。

横谷(2014)の研究では扱われていないが、父親・母親が回答者に対して用いた呼称を見ると、「名前呼び捨て」が多かった(父親70.4%, 母親65.0%)。これは、親子関係の上位者が下位者に対して示す社会的勢力の確認行動と解釈でき

る。French & Raven(1960)によれば、社会的勢力とは、ある事柄に関して一方が他方に影響を及ぼし得る最大潜在能力である(賞<reward>勢力; 罰<coercive>勢力; 正当<legitimate>勢力; 参照<referent>勢力; 専門<expert>勢力)。ここでは、正当勢力の確認が重要であると推測されよう。

##### 父親・母親と回答者との間の呼称の基底にある心理学的関係

父親・母親と回答者との間で交わされる呼称と接触経験2側面(「情動的絆」, 「統制」)との関連を見るために、一元配置の分散分析と共分散分析を行った。父親が回答者に用いた呼称と回答者が父親に抱いていた「統制」接触経験でのみ呼称の有意な効果が得られた。回答者に対して「名前+ちゃん」を用いていた父親に対して、「名前呼び捨て」や「ニックネーム」を用いる父親の場合よりも、「統制」接触経験が有意に低かった。

これらの結果は、「小学5・6年生の頃」に限定されるが、父親は子どもの呼び方の基底に子どもに対する自らの社会的勢力の確認を伴わせるといえる。しかし、母親は、子どもに対する社会的勢力の発揮とは独立に子どもの呼称を選択するのである。

興味深いことに、使用された呼称と呼称使用時の感情との間には、何の有意な関連も認められなかった。平均値を見ると全体的に1点台であり、当該呼称が使用された時には「心地よい」と判断されていた。これらの結果は、例えば父親の「名前呼び捨て」の基底に父親による社会的勢力確認

が存在していても、先の親族呼称規範(横谷, 2014)には一致しており、日常的に反復されることにより「心地よさ」が醸成されると考えられる。しかし、父親に対して呼称を回答者が使用した時には「統制」感情が高いほど「嫌悪感」喚起を推測するのに、母親に対する呼称使用ではそのような関係が見られなかった。このことも父親との間の呼称使用が父親による勢力確認と関係することを示唆しているといえよう。

### 今後の課題

横谷(2014)は、「家族内関係と呼称が関連する」という大命題を提起した。本研究では、この命題に従って、女子大学生に「小学5・6年生の頃」を回顧させ、父親・母親と回答者との間で交わされた呼称の基底にある心理学的機種の解明を試みた。先述したように、父親による呼称の使用の基底に社会的勢力の確認があることが推測されたが、なぜ母親による呼称使用が子どもに対する社会的勢力の確認を伴わないのかは今後の研究課題といえよう。ところで、諸井(2005)は、女子大学生を対象に父親と母親による社会的勢力の認知を測定した。因子分析によって父親と母親ともに3側面が抽出され、そのうちの2側面は共通であった(「参照・専門」, 「賞・罰」)。しかし、母親では「正当」の側面が独立に抽出されたが、父親では「正当」と「魅力」が合体して現れた。このずれが本研究で扱った呼称の影響の差異と関係しているのかもしれない。

また、父親・母親と回答者との間で交わされた呼称に関する補足分析は以下の興味深い傾向を示した。父親や母親に対する呼称は、親族呼称規範(横谷, 2014)に一致しているが、「お父さん-お母さん」(106名)と「パパ-ママ」(113名)にはほぼ2分された。対父親接触経験2得点と対母親接触経験2得点についてこの2群を比較したが、有意差は見いだされなかった( $t_{(217)}=2.0 \sim 1.95$ , *ns.*)。この2種類の呼称形式の採用に関する社会-心理的要因も今後解明すべきであろう。

横谷(2014)は、夫婦間の呼称の心理学的機能も検討したが、妻から夫への呼称よりも夫から妻への呼称のほうが夫婦関係満足度を促進していた。諸井(1997)は、女子大学生を対象として両親による家庭内労働の分担に関する公平性認知に焦点をあてた。本研究では、父親と母親との間の社会-心理学的関係性については扱わなかったが、今後は、親と子どもという枠組みに父親と母親との関係認知という観点を導入すべきである。

対人関係における呼称の日本的特徴に関する鈴木(1973)の枠組みを踏まえながら、呼称の基底にある心理学的機

を引き続き探索すべきであろう

### 〈付記〉

- (1) 本研究は、第2著者の芳賀美乃里(同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科2017年度卒業;現姓, 真鳥)が第1著者の下で卒業研究のために立案・実施した。ここでは、このデータを再分析した。
- (2) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 25 for Windowsを利用した。
- (3) E-Mail: kmoroi@dwc.doshisha.ac.jp

## V. 引用文献

- French, J.R.P & Raven, B. 1960 社会的勢力の基礎 D. Cartwright & A.Zander(Eds.) *Group dynamics: Research and theory*. TAVISTOCK PUBLICATIONS. 三隅二不二・佐々木薫(訳編)『グループ・ダイナミクスⅡ〔第二版〕』1970 誠信書房 727-748頁
- 諸井克英 1997 子どもの眼からみた家庭内労働の分担の公平性—女子青年の場合— 家族心理学研究, 11(2), 69-81.
- 諸井克英 2004 若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究(6) —親との関係経験が恋愛観におよぼす影響— 学術研究年報(同志社女子大学), 55, 129-143.
- 諸井克英 2005 女子青年における父親と母親からの影響認知 学術研究年報(同志社女子大学), 56, 89-96.
- 諸井克英 2006 女子青年における父親の魅力—父親との接触経験の影響— 総合文化研究所紀要(同志社女子大学), 23, 71-80.
- 諸井克英・橋本綾・中井香織 2011 恋愛関係における排他性と親子接触経験—女子青年の場合— 総合文化研究所紀要, 28, 120-129.
- 諸井克英・小切間美保・荒木友恵 2010 女子青年における食育経験の基本的構造(Ⅱ) —過去の親子接触経験と瘦身願望との関係を中心に— 総合文化研究所紀要(同志社女子大学) 27, 125-136.
- 三島浩路 2003 学級内における児童の呼ばれ方と児童相互の関係に関する研究 教育心理学研究, 51(2), 121-129.
- 長島裕輔 1998 大学の体育会における呼称 日本語学, 17(9), 45-49.
- 中條 修・滝浪常雄 1989 呼称に見られる対人関係の認識 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇), 40, 1-16.
- 小野寺敦子 1993 日米青年の親子関係と独立意識に関する



比較研究 心理学研究, 64(2), 147-152.

尾崎喜光 1998 生徒たちはどう呼ばれたいと思っているか  
日本語学, 17(9), 37-40.

鈴木孝夫 1973『ことばと文化』岩波新書

渡辺友左 1998「呼称」という論点 日本語学, 17(9),  
4-11.

横谷謙次 2014『家族内呼称の心理学—集団の構造と機能  
への呼称の関与—』ナカニシヤ出版

